

幼児の遊びにおける思考の過程

ー 剪定伐採木での家づくりー

安見克夫

(板橋富士見幼稚園)

【はじめに】

保育は、幼児教育の基本として環境を通して行われるものとしている。特に保育者の役割については、今回施行された教育要領で特に重視されている課題の一つである。幼児の主体的遊びを保障していくために、保育環境の構成と幼児の望ましい関係を築く関わり方の2面が必要といわれている。保育者の役割である関わりという援助のあり方を考えるとき、実際にどのような状況性の中で、保育者の関わりによって遊びが価値づけられ幼児の自己実現が達成されるのであろうか。

そこで、本研究は幼児の主体的活動がモノと他者との関わりの中で、どのような思考過程（記憶「幼児の経験」・認知・ことば・情緒の相互性：1998 岩田）をへて展開されていくのかについて、活動のはじまりと思われる場面から、教師の介入によって終了する場面までの一連の過程をビデオとエピソード観察で記録し、遊びを通した幼児の思考過程を読みとることで、保育者の望ましいかかわり方が見出されていくと考える。研究分析を行うにあたり、対象児の思考過程がはじめて出会う活動である環境を設定することとした。そのため今回は園環境ではじめて出会うケヤキの伐採木を使った活動の展開をビデオで収録し、その過程で交わされる人と言葉と行動を分析し遊びの思考過程を考察する。

【研究方法】

1999年11月15日から12月3日までの間、年長5歳児2クラス46名を対象に、遊びの開始（園庭の片隅に積み上げられた伐採木）を保育者が年長全幼児に周知し、どの幼児もこの素材を使った遊びが初めてできることを条件とした。幼児の主体的活動を中心とした遊びの一つとして、伐採木遊びを捉えているため、この遊びに参加していない者もいる。

記録収集は、他者とモノを介してどのような関係を創りだしていくかを上記の期間ビデオ撮影と共に、エピソード記録を行った。その際、保育者の言動に対する意図を保育終了後にカンファレンスを行い参考資料とした。場面の抽出方法は、保育者4人（経験年数3年から7年）により全収録を2回見てもら

い、顕著な遊びの変化が認められた場面をスチールとして抽出し、その場面での幼児の考えや行動から思考過程を読みとることとした。（結果として28カット抽出した）

【事例「伐採木の家づくり」】

事例1ー28カットを3つのユニットで解説する。

（28場面の状況と写真は当日ポスター掲示する）

①場面1ー5 遊びの始まり・各々が枝を選び出す（使用素材の認知）

朝の会の後、園庭で園児は先生から伐採木を遊びの道具として使えることを告げられる。

A 保育者 「あそこに積んである、木を使って遊んでもいいよ」

B 保育者 「あそこに積んである木で、何か創くれるかなー」と語りかけている。

年長組全幼児は、この時点で初めて山積みしてある伐採木を遊びの道具として使えることを認知した。

A 保育者の問いかけから幼児は小集団（一人または多くても3人程度）で、戦いごっここの道具として、振りかざす遊びへと発展し危険が共うと判断し保育者が中止した。よって本研究はB 保育者の（家づくり）を観察対象とし、幼児がこの素材をどのような遊びにどう取り入れ展開していくかを観察し保育者の援助と幼児の思考過程を考察していくことにした。第一場面では、教師から告げられたとき幼児は歓声を上げ伐採木場に走り、おのおのが山積みした伐採木を引きずり出している姿が見られる。互いに言葉を交わす者の姿は殆ど見られなかった。それぞれが実際にさわり引きずり出しながら互いのする行動を模倣しながら、それぞれが自分なりに何かをイメージしている姿が見られる。

場面6ー10参加者が家づくりの目的に向かって活動する（足場と横柱の固定）

F子、M子、E子は土に柱を埋めてガムテープで固定した。まだぐらぐらしている。園長が保育者に対して、「固定用アンカー」を打ち込むよう指示した。固定アンカーを打ち込んだ鉄棒にM子とB男、C男は、F子とE子が固定していた方法で、同じように

固定していた。女兒のグループが4本の柱と横枝をスズランテープで固定し始めた。保育者は、その固定する様子を横でじっと見ていた。この時点では特に保育者の言動はない。何とか倒れない程度の箱型の柱とはりが固定された。D男とH子は、山積みしである枝を運び出している。一時場所に運ぶとまた取りに行く行動が繰り返された。J男は、資材を運ぶための指示役となっていた。D男と、S男は、砂場からトロッコを持ち込み、今まで自分の手で運んでいたが、伐採木をトロッコで一気に運ぶ方法を考え出しJ男の指示で量と出発の指示を受けて第二の拠点（家づくりにより近い場所）に運び込んでいた。

② 場面11-20 家づくりの具体的な形が見え互いの役割が明確化する段階（役割の明確化）

第2の拠点に運び込まれた伐採木で支柱とはりができあがった小屋は柱がまだぐらつくので、M子を中心にA男、B男、C男達が実際に固定する者と、横で固定の仕方を指示する者、それを見つめる者との役割が特にきめることなくしぜんと遂行されている姿がみられる。役割が決まっています、支柱を固定している者に対して「違う、ここにまくの」「もっときつく」などといった適切な指示を出し互いの連携を快く感じている姿が見られた。

③ 場面20-28 屋根や外壁が完成に近づく 使用目的が明確になる（思考が錯綜する）

家づくりは、次第に複雑化し支柱の間にさらに柱が固定され屋根や入り口さらには家が何に使われるかなどが話し合われている。同時に壁づくりが発想され伐採木を運び終わった仲間が今度は段ボールを運び込み、支柱の固定を指示していた者が外壁の空間を測りながらダンボールカッターで切り刻み、ガムテープで張り始めた。最終的には、郵便局とキャンプと、たこ焼き屋が話し合われ、かなりぎくしゃくした関係の中で教師の助言を受けながら郵便局が完成した。それは、はじめの段階でトロッコの運搬に指示を出していたJ男の看板が掲げられたことで決着した。

【総合考察】

一連の活動について、モノ（意味するものと意味されるものとの関係）という物を介して、幼児集団（プロジェクト）が遊びをどのように開き（初動）、展開されていくのかを幼児の思考過程から読みとることができる。

①初動の展開については、保育者の発話が遊びを大きく左右させてしまうことがABの保育者の発話

から読みとれる。

②初動からモノが動き、幼児も模倣的に同じ行動が見られる時点で、幼児間の発話がほとんど交わされないことが分かる。（それぞれが、最初に行動をとる人とモノについて考えを統合し、新たなイメージを集約させようとしていると思われる）

③対人関係の均衡（モノと場とそれぞれのイメージ）が満たされている場合、自分の得意とする、またしたいと思う行動を互いが分掌し合い、それぞれが行動を尊重しながら展開していく様子が見られた。つぎに

読み取りの視点として、幼児のことばと行動・保育者のことばと行動からプロジェクトが思案する目的がどの時点で明確化したのか。

そして参加しているものがどの時点で理解し、その理解にもとづき展開していくのか。

④幼児間の理解は、伐採木場と第一移設場所・第二移設場所・家の設置場所の一連の幼児の動線上で、幼児が活動している行動とモノ（構築物）の動きから思考を集約し目的が理解されたものと考えられる。

⑤作業工程の中で、それぞれが動線上で役割ってきたポジションに保育者がこまめに寄り添い作業の達成度と幼児の意図のズレが感じられたとき、素早い保育者の発話（助言）が有効に働き展開の原動力となることが分かった。

今回の一連の活動記録を通して、観察者がビデオの再生過程で、大きく変化したと読みとれた場面及び保育者の言葉掛けの場面をスチールとして取り出し、全体の流れが把握できるよう整理することで、それぞれの場面の前後で交わされる幼児の思考過程と保育者のことばがけからプロジェクトに及ぼす影響を読みとることができると考えられる。

【まとめ】

幼児主体の自発的な活動を支えるために、保育者の役割は欠かすことのできない重要な援助となることが明らである。実践者は実際の活動の中で幼児がどのように思考し、仲間をつくり、モノを介して遊びを発展的に進めようとしているのかを予測し援助していくことはかなり難しいが、幼児の活動とモノの動きを幼児の動線から継続的に観察することで、状況に応じた関わりが可能となることが分かった。

今回の幼児の思考過程（記憶「幼児の経験」・認知・ことば・情緒の相互性）と保育者の言葉掛けに視点をあてビデオ解析することは保育者の質的研究に大いに寄与するものと思われる。